最優秀賞

【総合的な学習】

社会貢献をし、自らの幸せを創造する力の育成

新潟県燕市立燕南小学校
山口 哲史（やまぐち てつし）

1 はじめに

令和2年4月、異動して1年目の学校で6年生を担任した。子どもたちと共に「リーダーとしてがんばるぞ！」と希望に燃えていた矢先、最初の1週間で新型コロナウイルス感染拡大により休校となった。そこから1か月、3グループに分けた分散登校が5月の半ばまで続いた。普通登校が再開されてからも、互いの距離をとること、消毒やマスクの徹底など、コロナ対策が求められた。当然、縦割り班活動や委員会などの異学年交流は禁止であったし、5月の運動会も中止が早々に決定した。

2 主題設定の理由

新しい学習指導要領では、育成を目指す資質・能力の三つの柱を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」とした。三つの柱の最上位にある「学びに向かう力・人間性」は、「学びを人生や社会に生かそうとすること」とされている。この新学習指導要領について、赤坂（2018）は、「新学習指導要領は、社会貢献をし、自らの幸せを創造する人たちを意図的に育てようとしている」とし、「自分が誰かの役に立てるという感覚は、幸福感を生み出す」「自分の能力を生かして社会に貢献することが幸せな人生を送ることにつながる」と述べている。

私は、この赤坂の考えに大変共感した。例えば6年生は、4月から全校のリーダーとして様々な役割が求められる。1年生の世話や手伝い、クラブや委員会で先頭に立っての活動、縦割り班では1～5年生をまとめての活動…。1年生を迎える会・運動会などの行事での中心的な役割…。そうしたことを通して、悩んだり苦労したりしながらも、下級生が喜んでくれたり、行事が成功したりすることで「自分が役に立ったこと」を実感し、自己肯定感を高めていく。学校の様々な行事や活動は、「誰かの役に立てる」機会なのだ。だから、コロナ禍において様々なことが中止・禁止になったことは、大きな損失であり、何としてもその機会を創出せねばならなかった。

ただ、「役に立つ機会をつくる」だけでは、子どもたちの未来につながらない。奈須正裕（2017）は、「全ての子供を優れた問題解決者に育て上げる。これが、資質・能力を基盤とした教育が目指すところ」とし、赤坂（2018）は、「資質・能力の中核は、協働的問題解決能力」だとした。子どもたちに、機会を与えるだけではなく、「どのように協力したら人の役に立てるのか」という方法知を身に付けさせる必要があると考えた。

また、三宮（2018）が「『この学習は自分の役に立つ』ととらえることが意欲を高める」と言うように、「なぜ、協働するのか」「なぜ、関わるのか」という関わる理由を子どもたちがメタ認知できなければ、協働的問題解決能力を身に付けさせようとしても効果はあがらないだろう。関わること

の価値を実感し、メタ認知できるような学習活動の工夫をする必要がある。

本研究では、「①人の役に立つ機会をつくる工夫」「②協働的問題解決の仕方を身に付ける工夫」、「③関わることの価値をメタ認知できるようにする工夫」という3つの手立てによって、子どもたちに、社会貢献をし自らの幸せを創造する力を育成することを目的とする。

3 研究の構想

(1) 人の役に立つ機会をつくる工夫

コロナ禍で、学校でも、地域でも、様々なことが中止となりたくさんの制限がある。入学したての1年生、学校のみんな、地域の皆さん、誰もが困っている。6年生として、燕南小学校の児童として、みんなのためにできることを考えて行動すれば、役に立てた実感をもてるだろうと考えた。そこで、総合的な学習の時間に、自分たちにできることを考え、実行することにした。大人たちも直面するコロナ禍という課題に立ち向かった経験は子どもたちの未来を切り拓く力を育み、自己肯定感を高めることにつながるはずである。

(2) 協働的問題解決の仕方を身に付ける工夫

国語の「話す・聞くこと」の領域や「書くこと」の領域は、指導する内容をおさえればテーマは自由であるため、総合的な学習の時間との親和性が高い。総合的な学習の時間の中で、必要な時に組み込んでいけば、より実践的な力として身に付くであろうし、子どもたちも学んだことを生かせると考えられるだろう。そこで協働する場面において、その関わり方の指導を国語と合わせて行うことにした。

(3) 関わることの価値をメタ認知できるようにする工夫

当たり前が当たり前でないコロナ禍だからこそ、考えられることがある。それは「人はなぜ関わるのか」ということである。これまで、子どもたちは当たり前のように運動会をし、縦割り班で遊び、グループで学習をしてきた。全て人と関わる活動である。なぜ、私たちは関わるのだろうか、関わりたくなるのだろうか。「人のために何ができるか」を考えることが表テーマであるならば、「関わることの価値を考えること」は裏テーマである。子どもたちが、表のテーマを考え実行する中で、裏テーマである「関わる価値」についても考えていけるようにする。「関わる価値」について自分なりの考えをもてれば、協働的問題解決への意欲を高めるとともに、今後の人生においても積極的に人や社会に関わっていく姿勢をつくることができるだろう。

4 実践の概要

(1) 児童について

6年生31名に対し、2020年6月～2021年3月の期間に行った。

(2) 単元計画

①6年生として、全校のためにできることを考え、実行する。
②活動から、新たな課題を見出す。（人はどうして関わるのか、次の活動はどんなことをするべきか）
③新たな活動を考えるため、「関わりについて」の情報を収集する。（ゲストティーチャーから話を聞く、コロナをどうやって乗り越えて活動しているか見に行く等）
④集めた情報をもとに、運動会等にかわる校内イベントを実施する。
⑤イベントで体験したことをもとに、関わりについて自分の考えをまとめ、学習発表会（本校では、総合の発表を行うことになっている）で発表する。

※コロナ禍であったので、大筋だけ決めた。子どもたちの様子とコロナの状況を見ながら、変更していった。

(3) 指導の実際

①課題を見出すための体験活動（燕南小元気づけ隊パートⅠ）

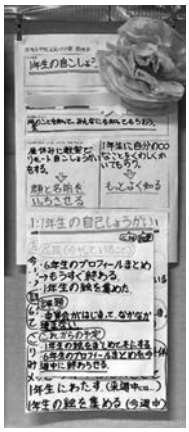
最初の課題は、気付かせずともあった。４月からたくさんの行事の中止、活動の制限があったからだ。子どもたちに「入学したばかりの１年生や、２～５年生の全校のみんなのために、６年生としてできることは何か」と問いかけた。子どもたちは、話し合って活動内容を考え、「燕南小元気づけ隊」と名付けた。「不安になっている人もみんなも元気よく学校生活を送れるように、元気づけたりもり上げたりしよう」とめあても決めた。

提案された内容は下のように14個あったが、主体的に取り組めるよう、自分のやりたいものを選ぶように伝え、全てのプロジェクトを実行することにした。その結果、それぞれのプロジェクトに１～４人で分かれることになった。

右の写真のように、プロジェクトのめあてと具体的な活動内容を考えてポスターに書き、行動に移した。みんなで1つの目標に向かう活動であるので、２週間に１回、自分たちのプロジェクトの成果と課題を振り返り、他のプロジェクトに報告する機会をつくった。手伝ってほしいことや悩みなどの相談もそこで行った。書いた中間報告は、ポスターの上に貼っていき、他のプロジェクトがいつでも見られるようにした。

子どもたちは全校のリーダーとして、休み時間も準備や活動に熱心に取り組んだ。６月の１か月だけで終わる予定だったが、子どもたちは自分たちで話し合い、７月末までやり続けることを決めた。早く終わった場合は、他のプロジェクトの手伝いにまわり、最後までみんなで活動することも決めた。

全ての活動が終了した後、各プロジェクトの成果と課題を発表しながら「燕南小元気づけ隊」のまとめを行ったところ、大きく３つの成果を子どもたちは感じていた。１つ目の成果として「リモート案内動画で喜んでもらえた」「クイズを楽しみにしてもらえた」「メッセージで笑顔にできた」等、めあてどおりみんなを元気づけ、ポジティブな気持ちにすることができたこと。２つ目の成果として「リモート自己紹介で１年生に６年生を知っても



燕南小元気づけ隊14のプロジェクト	
掲示関係	○先生紹介 … 先生方にインタビューをし、ポスターにまとめ掲示する。簡単に放送もする。
	○エンジョイメッセージ … 玄関に毎日、６年生から全校へのメッセージを掲示する。
ランチ放送	○学校クイズ … 週２回（月・木）、学校に関するクイズを、給食の時間に放送する。
保健関係	○手洗い放送 … 20分休み、昼休みの終わりに手洗いを呼びかける放送を行う。
	○手洗い動画 … 手洗い動画を作成。朝の会や休み時間に各教室で流してもらう。
	○マスクづくり …「手作りマスクの作り方」を作成し、配付する。自作マスクを保健室に寄付する。
	○保健関係ポスター … 手洗いなどをよびかけるポスターを作成し、掲示する。
１年生関係	○１年生ポスト … １年生のワークスペースにポストを設置。１年生の質問に６年生が返事を書く。
	○１年生の自己紹介 … ①１年生が学習で作った自己紹介カードをもとに、ポスター作成。
	②リモート（Zoom）で自己紹介し合う。日替わりで、縦割り班の人同士で。
	○１年生行事カレンダー … １年間の行事を紹介するカレンダーを作成する。
	○リモート学校案内 … １年生に学校を説明する動画を作成する。
全校児童へ	○青空班自己紹介カード … ６年生の自己紹介カードを縦割り班のメンバーに配付。
	○リモートあいさつ … 玄関にあいさつ用のテレビを設置。リモート（Zoom）であいさつ運動。
	○コロナ撃退キャラ募集 … コロナ撃退のキャラ募集を行う。

らえた」「先生インタビューで、新しい先生のことを全校に知ってもらえた」「自己紹介カードで他学年にも6年生を知ってもらえた」等、コロナ禍でも関わりをつくることができたこと。3つ目の成果として「放送やポスターで、手を洗う人が増えた」「リモートあいさつで下級生があいさつしてくれるようになった」等、学校が良くなったことが挙げられる。子どもたちは、自分たちの「燕南小元気づけ隊」の活動によって、学校や他学年の子どもたちのためになれたことを実感することができた。

同時に、コロナ禍でなければもっとできたこと、コロナ禍だったからこそできたことも聞いた。「直接1年生を案内したかった」「直接1年生にインタビューしたかった」「一緒に遊びたかった」と、コロナ禍でなければ、本当は直接関わりたかったという思いがたくさん出た。一方で、「パソコンを使う技術があがった」「どうしたらできるか工夫しなければいけなかったから考える力がついた」等と、コロナ禍だからこそできた成長に気付くこともできた。この1学期の体験活動（燕南小元気づけ隊）で得た「本当はもっと関わりたかった」という思いが、次の新たな課題（裏テーマ）を生むことにつながっていった。

②新たな問い（課題）を生むための活動

2学期になった。燕南小元気づけ隊が終わり、次に取り組みたい活動を班ごとに考えた。ほとんどの班で、学校だけでなく、地域の人やお年寄りのために何かしたいという意見が出た。子どもたちの関心が学校から地域へと広がっていることを感じた。

そこで私は、中止になってしまった行事にどんなものがあるかを子どもたちに問うた。運動会、全校登山、お祭り、花火大会…。地域や学校で中止になった行事がたくさん挙げられた。その共通点を考えたところ、どれも「大勢でやる」「人とふれ合う」活動であった。「元気づけ隊」での振り返りで、「直接関わりたかった」とたくさんの子どもが言っていたことを引き合いに出し、「私たちは、どうして集まるのか。どうして、関わるのだろうか。それが分かれば、地域のため学校のために何をすればいいか見えてくるのではないか」と伝えた。「燕南小元気づけ隊パート2」を行うために、「どうして人は集まり、関わるのか」という課題を追究していくことになった。

この課題について、クラスで話し合った結果、次のような理由にまとまった。しかし、子どもたちは「これで本当にいいのか」と腑に落ちない様子であった。そこで、子どもたちと相談し「人と関わる仕事をしている人」に話を聞き、どんな考えをもっているかを聞くことにした。

【子どもたちの考えた関わる理由】
①自分たちの成長につながるから
②仲良くなれる・絆が深まるから
③未来や将来のためになるから
④新しい発見につながるから
⑤楽しい気持ちになるから
⑥ふれ合うことで、何かの意味が理解できるから
⑦心情の整理ができるから

③問い（課題）を追究するための活動

子どもたちが話を聞きたいと言った人をリストアップし、地域コーディネーターの方にお願いしたところ、ゲストティーチャーとして、下表①～④の4人の方に来てもらえることが決まった。

また同じ時期、コロナウイルス感染症の広がりにより、修学旅行の行き先を県外から県内に変

【ゲストティーチャーの皆さんと、話の内容】

①燕市公民館　前館長	…公民館を利用する人との関わり
②図書館司書	…図書館を利用する人との関わり
③デイサービス施設所長	…高齢者との関わり
④自治会長	…祭りと人との関わり
⑤サントピアワールド園長	…お客さん、同業者との関わり
⑥ホテルの館長	…お客さんとの関わり
⑦水俣病被害者の方	…水俣病の経験と人との関わり

更しなければならなかった。その時、クラウドファンディングで存続が決まった新潟県内の遊園地「サントピアワールド」のニュースを見た。人とのつながりによって救われた遊園地では、どんな思いでいるのだろうと思い、園長さんに連絡をとったところ、快くインタビューを引き受けてくださった。また、修学旅行で宿泊するホテルの館長さんも時間をつくってくれることになった。さらに、サントピアワールドのある阿賀には水俣病が起こった歴史もある。新潟水俣病について様々な取り組みを行う「あがのがわ環境学舎」さんとも連絡をとり、水俣病の被害者の方の話を聞くこともできることになった。

講師の方々には、子どもたちがやってきた元気づけ隊の活動と、第2回の活動に向けて「関わりの価値」について考えていることを伝えた上で、人との関わりについての経験や考えをお話してもらった。

④情報を整理し、自分の考えをつくる活動

多くのゲストティーチャーの話から得た学びをもとに、自分の考えをつくることにした。自分の意見をどのようにまとめるかについては、国語の「書く」単元と合わせて指導した。国語の教科としての指導事項は下の3点であった。それを総合の取組と合わせた。

①具体的な事実をもとに、現状や問題点を整理する。
→7人の方にインタビューした話、自分自身の関わりの体験をもとに、「人はなぜ関わるのか」についての自分の考えを示す。
②提案の理由を明確にして、内容を具体的に示す。
→自分の関わりについての考えをもとに、具体的な元気づけ隊パート2の内容を書く。
③提案が実現したときの効果を示す。
→もし、選ばれて実現できたら、どんな効果があるのかを書く。

作文が書けたところで、地域（保護者）に向けての発表をするため、プレゼンの資料づくりに入った。子どもたちは昨年度からパワーポイントを使っており、ある程度慣れている様子だったので、1人1人スライドをつくって発表することにした。良いプレゼンの資料と悪いプレゼンの資料を比較し、スライドをつくるコツを確認してから作成に入った。

⑤自分の考えを発信する活動

発表会では、1人1人ブースをつくり、地域の人（保護者・来ていただいたゲストティーチャー）や学校の子ども（5年生）に向けて、自分の提案を発表した。保護者は地域の代表として、5年生は学校の代表として、「6年生にこの活動をやってほしい！」と思うものを選んで投票してもらった（6年生同士では、プレ発表会を行い、その際に投票した）。

投票の結果を集計し上位8つのプロジェクトを選んだ（1つのプロジェクトにつき、4人程度のほうが対話的な学びは機能するからである）。次ページの8つに、3～5人に分かれて活動をすることにした。

印象的だったのは、ただ「みんなを楽しませる」だけではなく、自分たちが「関わりをつくる」「人と人をつなぐ」といった提案が多かったことだ。例えば、「①昔の遊び体験会」は、6年生が受けるのではなく、「地域の高齢者と学校の子どもたちをつなぐために行う」と言っていたし、「②花を一緒に育て隊」は、6年生と地域の人の仲を深めるだけでなく「地域の人同士で仲良くなってほしい」と言っていた。自分たちが地域社会のた

プロジェクト名	目的と内容
①昔の遊び体験会	幅広い人が楽しめ、何かあったとき、団結力を生めるようにする。そのために、昔の人が講師となり、子どもたちに遊びを伝える「昔の遊び体験会」を企画する。
②地域の人と花を一緒に育て隊	地域の人と友達になり、親しむ。そのために、みんなで花を植え、みんなで世話をする。
③気持ち共有プロジェクト	高齢者のやりがい、生きがいをつくれるように活動する。そのために、自分たちが訪問場所に行って行う「気持ち共有イベント」を行う。
④ミニミニ３３ティーチャー	学校の人との絆を深め、みんなで成長し、いい時間を過ごす。そのために、１日ミニ先生（ミニ授業）を行う。
⑤おそうじ隊	おたがい成長し、新しい発見につなげ、将来に役立てる。そのために、地域の人といっしょにゴミ拾いを企画する。
⑥みんなで考えを深め隊	全校のみんなにいろいろな知識をつけてもらい、新しい発見の手助けをする。そのために、放送レクリエーションをする。
⑦園児と学校を楽しませ隊	園児と学校を元気つけるため、幼稚園の子どもたちを招いてミニゲームをする。燕南小と幼稚園交流会をする。
⑧地域楽しませ隊	地域の人たちを楽しませて、元気つける。そのために、みんなを招いて、レクリエーションをする。

めにできることを深く考える姿があった。

⑥課題を解決するための活動（燕南小元気づけ隊パート２）

選ばれたプロジェクトを考えた子どもをリーダーとして、それぞれのプロジェクトの具体的な計画を話し合うことにした。しかし、ちょうどこの頃（2020年10月末）、コロナ感染の第２波が来てしまい、校内はともかく校外との関わりは厳しく制限されることとなってしまった。８つのプロジェクト中、６つのプロジェクトが活動の変更を余儀なくされた。

そこで、「どう話し合っていけばいいのか」を学ぶため、国語の「話す・聞く」単元と合わせて指導した。国語の教科としての指導事項は、次の４点だった。

①目的や条件を確かめて、計画を立てる。
→「活動をやろうとした当初の目的」はそのままにして、「３密を避ける、外部と直接関わらないという条件」のもと、どうしたら目的が達成できるかを話し合う。
②自分の主張や理由、根拠を明らかにして話し合う。
③目的や条件に合っているか、互いの考えをよく聞く。
④考えを広げる話し合いと、まとめる話し合いをくり返し、結論に向かう。
→「主張・理由・根拠・質問」カードを使い、自分たちが今何を話しているのかを意識しながら話し、考えを広げる。そして「共通点・異なる点」「改善点・問題点」カードを使いながら話して、考えをまとめる。
→考えがまとまったら、私のチェックを受けた後、校長のチェックを受けてOKであれば活動開始。ダメであれば、条件を再度確認して話し合いをやり直す。

次ページの写真のようなカードを用いながら、話し合いを行った。そして考えがまとまったら、私のチェックを受けて校長のところに提案にいった。

コロナ第２波の真っ只中である。私がOKだと考えても、管理職の判断は分からない。子どもの見えないところで、私と校長が相談するくらいなら、子どもたち自身でぶつかってもらおうと考えた。校長も快諾してくれ、私のOKをもらったグループから校長室に向かった。しかし、一度で合格だったところは１つもなかった。私自身も正解が分からなかった。私が大丈夫だと思っても、「ダメでした」と帰ってくる子どもたち…。一緒になって、どうしたらいいかを考えた。

それぞれのプロジェクトは最終的に下の表のような活動を行った。活動が変わったものの、どのプロジェクトも当初の目的を達成することができた。

活動中の子どもたちの感想の一部を次ページに示す。どの子どもも人の役に立つことで自己肯定感を高めることができた。同時に下線部のように、工夫すれば様々な関わり方ができること、関わることで自分自身にもメリットがあることを実感していた。

最後に、それぞれのプロジェクトごとに「成果」と「関わりについて思ったこと」をスライドにまとめて発表し、互いの頑張りを称え合った。それぞれの発表を聞いた上で、今、自分が関わりに

プロジェクト名	実際に行った活動
①~~昔の遊び体験会~~ →メッセージで地域を元気づけ隊	・回覧板を使って、６年生からの元気づけメッセージ（寄せ書き）を届けた。 ・デイサービスのスタッフさんに向けて、６年生のメッセージを送った。 ・デイサービスの利用者さんに向けて、折り紙とミニメッセージを送った。
②~~地域の人と花を一緒に育て隊~~ →花を一緒に育て隊	・ヒヤシンスの球根を２つの保育園に送り、育ててもらった。自分たちも学校で育て、ヒヤシンス日記を学校のホームページに載せ、みんなと共有した。 ・保育園の子どもたちに、どんな花が咲くかを絵にかいてもらい、その絵にメッセージを書いて返した。 ・咲いたヒヤシンスをハーバリウムにして玄関に飾り、学校のみんなに楽しんでもらった。
③気持ち共有プロジェクト	・デイサービスの利用者さんに向けて、５年生をまきこみ、５・６年生で花束メッセージを作成。 ・デイサービスの利用者さんとリモート交流会。 ・お礼の手紙と、リモート交流会での景品をプレゼント。
④ミニミニ~~３３~~６ティーチャー　※規模を縮小	・１、２年生との交流会を実施。（折り紙や、塗り絵、間違い探し） ・来てくれた人たちに、後日お礼のメッセージをプレゼント。
⑤~~おそうじ隊~~ →お手伝い&PR隊	・地域の人たちに手伝ってほしいところはないか呼びかけ。 →地域の花だんの掃除。 ・学校で頑張っている子どもたちのことを伝えるポスターを作成。 →学校のホームページに載せるとともに、自分たちで店に電話して掲示を依頼。
⑥みんなで考えを深め隊	・その日のニュース、雑学、世界の〇〇を放送した。 ・ポストをつくり、全校児童から知りたいことを募集し、その質問について調べて答えた。 ・放送しきれなかったものは、ポスターにして掲示した。
⑦~~園児と学校を楽しませ隊~~ →園児を楽しませ隊	・保育園①とリモート交流会を実施。（折り紙・動物ジェスチャークイズ・読み聞かせ） ・保育園②に動画を送った（折り紙の折り方、学校クイズ）。 ・保育園①と保育園②に、プレゼント作成（折り紙、塗り絵、寄せ書き）。
⑧地域楽しませ隊	・クイズのプリントを作成し、保護者に配付。家族で楽しんでもらった。 ・学校のみんなに向けて、学年ごとのクイズやミニ知識のスライドショーを作成。

ついて思っていることを1人1人が書いて、活動を終了した。児童Dの書いた作文を下に示す。

児童Dが、元気づけ隊やゲストティーチャーの話など、様々な体験から関わりについての自分の考えをつくっていったことが分かる。他にも「（様々な）気持ちを共有するため」「みんなで達成感を味わうため」…と子どもたちの答えは多様だったが、みんな関わることの価値を実感することができていた。答えは1つではない。自分なりの答えを出したことに意味がある。関わり方についても、「間接的でも関わることに価値がある」という子どもがいれば、「間接的に関わって、改めて直接関わることの良さを実感した」という子ども、「どちらが良いというより、どちらも良いところがあると思ったほうがいい」という子どももいた。コロナ禍だからこそ、「関わり」について深く考えることができた。

〈子どもたちの感想の一部〉

回覧版でみんなを元気づけるメッセージを送ったA（①メッセージで地域を元気づけ隊）

地域の人たちからいっぱいほめられました。回覧板はとても地域の人をつなぐものだと思いました。最初はこれで元気になるのかなと思っていたけど、やったら本当に元気づけられて嬉しかったです。

デイサービスの施設とリモート交流会を行ったB（③気持ち共有プロジェクト）

リモートだったけど、みなさんとゲームやビンゴ大会・体操などをして楽しかったです。元気づけ隊で皆さんに喜んでもらえると、とてもうれしくなってやる気が出てきます。人を元気づけたら、自分の元気が出てくるんだと思いました。

各家庭にクイズのプリントを配布したC（⑧地域楽しませ隊）

友達のお家の人から「クイズをすごく楽しめたし、家族が話すきっかけになったよ」と言ってもらいました。僕たちが作ったクイズで、「楽しい」を共有して家族の会話を作ることができたのかなぁと思ってうれしくなりました。

5 成果と課題

年度の途中から委員会が始まったが制限のある常時活動のみであったし、全校の縦割り班活動は1年間なかった。それでも、「燕南小元気づ

〈児童Dの作文〉

1年間をふり返ってみて、初め私は「楽しむために関わる」と思っていました。

でも、元気づけ隊①の「1年生ポスト」で、1年生に分からないことを教える中で、楽しむのもあるけど「分からないことを知るために関わる」のかなと思いました。

次にゲストティーチャーの話を聞きました。デイサービスの所長さんは「人とのかかわりで生きがいが生まれる」と言っていて納得できました。相手から自分の知らないことを教わって興味を持って自分の趣味ができたり、その相手とだけ通じる話などができたりしたら、たしかに生きがいになると思ったからです。また、自治会長さんは「一緒に物事をやることで絆が深まる」と言っていました。関わることで絆が深まり、相手と話したり物事をなしとげたりできたら、それも生きがいになるなと思いました。

そして、元気づけ隊②では「お手伝い＆ＰＲ隊」をしました。自治会長さんからのお願いで花だんそうじをしました。クラスのみんなが手伝ってくれました。虫が苦手な人や土をあまり触れない人も、頑張って一緒に花だんそうじをしてくれてうれしかったし、自治会長さんも喜んでくれたと思います。また、ＰＲでは燕南小学校のＰＲポスターを町の店に貼ってもらったり、学校のホームページにのせたりして、たくさんの人に見せることができました。「お手伝い＆ＰＲ隊」を通して思ったことは、「お願いに応えることでうれしくなり、生きがいになるということ」と、「元気のない人が自分たちのがんばりを見て元気になりうれしくなるということ」、さらに「その元気になったことで自分たちもうれしくなる」ということです。「かかわることで、どちらも生きがいになり生きがいをつくることができる」と思いました。

このように、私の関わりの考えは変わりました。これから私はこの1年間の学びを生かして、たくさんの人と関わり、生きがいをたくさん見つけ、だれかの生きがいを生みたいし、生きがいを大切にしていきたいです。

け隊」があったおかげで、子どもたちは常に「学校や地域のみんなのために役に立ちたい」という思いをもって活動し続けることができた。授業時間だけでなく、休み時間に準備をしたり、家に持ち帰って作業を進めたりしていた。誰かの役に立っていること、誰かのために頑張っている自分を感じることで、自己肯定感を高めることができた。

また、総合学習で高まった課題意識によって、国語の「話す聞く」活動、「書く」活動が「課題解決をする方法」を学ぶ場として効果的に機能したと思うし、２つの教科を合わせることで時間を捻出することにもつながった。

さらに、活動をしながら「なぜ、関わるのか」というテーマについて考えることを繰り返した。体験を伴った振り返りによって、子どもたちは、様々な関わりの価値から、自分なりの価値を見出していくことができた。人は関わって生きていく。今回の学習で得た学びは、子どもたちのこれからの人生に必ず生かされることだろう。

6 終わりに

コロナ禍だからこそ、できたことがたくさんあった。「なぜ人と関わるのか」という当たり前のことを課題にするのは普段なら難しかっただろう。活動する中で「おたより」「回覧板」「手紙」といった、当たり前のように身の回りに存在していたツールの価値の再発見や、「リモート」などの新しいツールの良し悪しについて考えることもできた。

今回、大人でも対応に四苦八苦しているコロナウイルスに対して試行錯誤し、自分たちの目標を達成できたのは子どもたちの大きな経験と自信になったと思う。総合的な学習の時間に支えられた１年間だった。これからも、子どもたちの未来につながるような力をつけられるよう、実践を積み重ねていきたい。

【参考・引用文献】

・赤坂真二『資質・能力を育てる問題解決型学級経営』 明治図書　2018
・三宮真智子『メタ認知で<学ぶ力>を高める 認知心理学が解き明かす効果的学習法』 北大路書房　2018
・田村学 『校内研修シリーズ　№25：「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて』 独立行政法人教職員支援機構　2018
・奈須正裕 『「資質･能力」と学びのメカニズム』 東洋館出版社　2017
・文部科学省『小学校学習指導要領解説（総合的な学習の時間編）』 東洋館出版社　2018